

音声受信未習得の段階にあった6歳児 K 君の5年間の言語 訓練経過と結果及び家庭・学校でのコミュニケーション

林 耕司

長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

要旨：＜S-S 法＞言語発達遅滞検査で初診時 A 群（音声受信未習得）と評価し、その下位群「a.動作性課題と記号形式—指示内容関係が全体的に遅れ」に当てはまったコミュニケーション態度非良好の6歳の K 君の5年間にわたる訓練経過と結果及び家庭や学校でのコミュニケーション行動の変化を一年ごとに区切って報告した。訓練の結果、受信面は段階 2-1 機能的操作から段階 3-1 身ぶり記号の段階に伸びていった。動作性課題では色の5色分類が可能となり、ミニチュアを用いたカテゴリー分類も少しできるようになった。日常生活では両手を叩いての要求行動から発展し、写真で要求行動を示したりできるようになった。また、生活の流れの中で身ぶり記号に伴って繰り返し使われる促しのことばを理解し行動に移すことができるようになってきている。

キーワード：＜S-S 法＞言語発達遅滞検査 A 群（音声受信未習得）受信 発信 コミュニケーション

1. はじめに

本症例 K 君の話をしようと思う。K 君は 2015 年生まれで生下時体重 3,200 グラム、現在 10 歳。特別支援学校に通う小学 5 年生である。彼は 6 歳の時に双胎の兄 S 君（K 君と同じレベルの言語発達）と共に当ことばの相談室にやってきて、月 1 回の言語訓練をすることになった。言語評価では兄弟共に受信・発信ともに 1 歳前後の発達レベルであった。排泄は 10 歳の今でも自立しておらずおむつが当てられ、相談中に二人とも失禁してしまうことが続いている。K 君は当初輪ゴムをじゃらじゃらと下に落としたりして楽

しむ遊びを好んでいた。初診から半年ほど様子を見ながら訓練をすすめた。K 君の言語能力は＜S-S 法＞言語発達遅滞検査で評価すると A 群（音声受信未習得）の状態、下位群「a.動作性課題と記号形式—指示内容関係が全体的に遅れ」に当てはまった。そして、コミュニケーションに関しては視線が合わず人への関心も乏しいコミュニケーション態度非良好の II 群と判定された。

初診の 6 歳から 6 歳半の半年間の言語・コミュニケーション評価、訓練では以下のようなこ

とが明らかになった。発信（表現）面では有意味な音声発信はなく、視線は合わず何らかの身ぶり発信もみられなかった。非言語面では日常生活でおもちゃはほとんど手にしないが検査場面では太鼓と急須をその機能に従って操作することができ、積み木はある時は8個積めたり、ある時は投げてしまったりしていた。人形には興味を示さず、事物はめ板は盤や板ピースに注目せずふるい分けて入れることはできなかった。しかし、6歳半近くになると3種の対となるペアー（ビー玉：ペットボトル、バチ：太鼓、お手玉：箱）でのふるい分けが可能になっていった。日常生活場面では輪ゴムやひも状のものをいじっているのを好んだりしているが、クーゲルバーンを出すと玉を入れての遊びが30分続いたりした。食事には興味を示し、スプーンやフォークが出ているとそれをテーブルに持っていたりすることができ、スプーンを使って食事ができていた。また、親指と人差し指での物のつまみが可能であった。テレビや動画も楽しむ様子があり、「いないいないばあ」を見て笑ったり、電車の動画の動きに見入ったりしていた。要求は両手をたたき身ぶりでお菓子を要求したり、みそ汁のお代わりをしたくてお碗を差し出したり、冷蔵庫からヤクルトを取り出し飲むことを要求できていた。また、家庭では兄弟共に大声を出すのでお互いにいらいらすることも多くあるらしかった。また、買い物でスーパーに行くと座り込んで動かないこともみられたが、母親の声のトーンでダメだよということが少しわかるようだった。以上のような半年の経過による評価を踏まえ、次のような訓練計画を立てた。

2. 訓練計画と訓練目標

重度の知的障害と自閉スペクトラム症がみられ、

6歳半時点でもA群（音声受信未習得）に留まっており、自力で身ぶり記号や音声記号を獲得することは困難と考えられたので、月1回の訓練を開始することにした。

まず当面のゴールは段階2-3選択行動の形成とし、身ぶり記号から音声記号の受信も視野に入れた訓練目標を設定した。訓練教材としては日常事物・事物はめ板・形はめ板などを用いて段階2-2ふるい分け行動を形成していくこととした。強化子は日常的に関心が強く持ち歩いている事物やクーゲルバーン、お菓子を用いることにした。また、日常生活では日常繰り返し起こる行動（例：トイレに行く、お風呂に入るなど）を事物や写真を音声と共に提示することで理解がすすむよう母親にはその都度アドバイスしていった。

3. 5年間の訓練経過と結果及び家庭・学校でのコミュニケーション

【第I期 訓練経過と結果 6:7~7:6の一年間】

一訓練では段階2-3選択の訓練がこの時期の半ばに始まり、日常生活では実物での要求ができるようになり、遊びが広がった。また、訓練場面では「チューして」という音声指示だけで兄のほっぺにチューすることも見られた。一

<家庭・学校での遊び・コミュニケーション>

毎日繰り返して起こる一定の状況の中で声掛け（例：トイレ行くよ、ブーブー乗るよ、お風呂だよ）をするとその行動が促されることが増えてきた。要求行動面ではお皿を持ってデザートを要求したり、学校では校庭に出るときにいつもかぶる赤白帽子を持って来てブランコに乗りたいと意思表示することもみられた。また、要求行動は遊びの中でもでてくるようになり風船をもってきて母にふくらませてもらいたがったり、ミニカー（手に持ったミニカーを後ろに引いて手を離すとそのまま自動的に前に進む）を母が発車させると、そ

れを本児が取りに行き母に渡し、また発車させてもらうという遊びを好むようになった。

兄に比べ視覚性刺激の強いおもちゃや身の回りの事物に興味を示し、絵本（お母さんといっしょなど）や図鑑を見たり、キラキラ光るビーズに気がひかれたり、ボタンを押して童謡を聞いたり、ペットボトルの蓋の開け閉めをしたりなど遊びが拡大していった。学校では水着や水筒を見せると着席（座って水着に着替えたり、座って水を飲んだりするため）できたり、タイマーが鳴るとブランコが交代できることを学習して待つことができるようになっていった。

【第Ⅱ期 訓練経過と結果 7:7～8:6の一年間】

—前半の時期は写真でのふり分けが可能になったり、選択肢が増えてもふり分けが可能になるなど大きな成長がみられている。後半の6か月では日常生活行動の流れが分かりはじめ、訓練では事物はめ板での段階2－3選択行動が可能になりはじめた。—

＜訓練経過と結果＞

2種の写真のふり分け（なっちゃんペットボトルとチョコ）や4種形の型はめを使ったふり分けが可能となり、また選択肢が3個から倍の6個に増えても可能になり、事物はめ板での段階2－3選択も少し可能になり始めた。舌打ちをすることが多くみられたが、舌打ちへの注目や模倣はできなかった。兄の訓練が終わるのを待っている間、寝転んでじっと外を見ていることも多くみられた（木の葉を揺らす風の動きや車の動きを見ているようだ）。

＜家庭での遊びとコミュニケーション＞

受信面では写真を見せながら音声で「お手々ごしごし、トイレ行くよ、お風呂だよ、ブーブー行くよ、公園行こう、ブランコ乗るよ、チョコ、ゼリー」と促すと行動につながるが増えていっ

た。食器の片づけを促すと少しできることもあった。柿ピーの菓子と皿、ペットボトルとコップの組み合わせがわかるようになってきた。発信面ではトイレやおはようという音声刺激に対してそれらしい単語を表出して応対することがみられている。また、一日中おおきな声を出している。iPadのアプリに興味を示すようになっていて、15個のアプリの中から電車（乗り物）のアプリを簡単に見つけて押して、消防車を出しそこにタッチすると梯子が伸びてくるのを愉しんでいる。絵本は「チンチン電車の走る街」や「アンパンマンを探せ」を好んで見ている。海の生き物のカクレクマノミの模様が気に入ったのかその動画も楽しんでいる。ストローの袋からの出し入れやストローの床へばらばらと落とすことへの興味も強まっている。

【第Ⅲ期 訓練経過と結果 8:7～9:6の一年間】

—この期の前半は訓練で事物はめ板で段階2－3選択が可能となり、段階3－1身ぶり記号でも少し理解ができるようになっていった。この期の後半では特に色分類が可能になった—

前期＜訓練経過と結果＞

選択肢が3個から6個に増えても確実に事物はめ板でのふり分けができるようになり、身ぶり記号の受信も選択肢が2個で成立するようになった。コミュニケーション面では対面でのSTとのペットボトル・ビー玉・木製の◎の机上での転がし合いができ、1から10まで声を出して数えながらやるとやりとりが長く続くようになっていて、やりながらこちらの顔を見ることも増えていった。また、座り込んで、もうやりたくないという強い意思表示をはっきり示すことが多くなってきた。

前期＜家庭・学校でのコミュニケーション＞

貼ってある写真からお菓子やスマートホン、ストローなどを選び母に持ってきて要求できるようになってきた。学校でもバランスボールの要求を写真でするようになってきている。

後期＜訓練経過と結果＞

2 個だけの選択肢なら帽子・歯ブラシの身ぶり記号の理解が確実にできるときも増えてきた。特筆すべきはプラステンでの色分類が 5 色で可能になってきたことだろう。

後期＜家庭・学校でのコミュニケーション＞

発信面では「ジャー」「上手」、学校では「脱ぎ脱ぎ」の音声それぞれが模倣されることがあった。学校では一連の行動の流れ（トイレ→おむつ捨てる→手洗い→手拭き→ハンカチをしまう）が時間はとてもかかるが行動で示すことができ始めている。

[第Ⅳ期 訓練経過と結果 9：7～10：6 の一年間]

＜訓練経過と結果＞

受信面では段階 3－1 身ぶり記号の受信はこちらになかなか注目できず思うように訓練は進まなかった。また、この期の前半では色分けの材料をプラステンの◎から、ペグ差しのペグにし、そのペグを色別にお皿にふるい分ける訓練に替えると 1/2 選択でも成績が低下し難しくなった。しかし、この期の後半になるとペグでの 4 色分類が可能になり、見本項が絵カードになっても同じ絵カードを選択することが可能になっていった。また、ミニチュアを用いた分類（果物・乗り物・動物）が少し可能になってきた。

＜家庭でのコミュニケーション＞

リスパダールの投薬量を増やしてきて、指示が入りやすくなり、光や音の刺激疲れで眠ることもなくなり、「だるまさんが」の絵本を見ているこ

とがみられるようになった。また、一連の流れの中で「靴はいて待ってて」の言語指示に従えることもでてきたようである。

4. まとめ

初診時＜S-S 法＞言語発達遅滞検査で症状分類は A 群（音声受信未習得）でコミュニケーション態度非良好と評価した 6 歳の K 君の 5 年間にわたる訓練経過と結果及び家庭や学校でのコミュニケーション行動の変化を一年ごとに区切って報告した。訓練の結果、受信面は段階 2－1 機能的操作から段階 3－1 身ぶり記号の段階に伸びていった。発信面では時に単語の音声模倣らしき発信がみられている。動作性の側面では色の 5 色分類が可能となり、ミニチュアを用いたカテゴリー分類も少しできるようになった。日常生活では両手を叩いての要求行動から発展し、写真で要求行動を示したりできるようになった。また、生活の流れの中で身ぶり記号に伴って繰り返し使われる促しのことばを理解し行動に移すことができるようになってきている。

本研究は成田会倫理委員会の承認を得て行われた。本研究に関する利益相反はない。